

犬、猫の誤飲：傾向と対策【傾向編】

アニコムホールディングス／島村麻子

犬、猫の誤飲といえば、プライマリーケアを担う多くの動物病院にとって非常に身近な問題であろう。実際、アニコム損保には1年間で5,708件*の請求があった。これは、罹患率で示すと全体の**1.7%**にあたる。ペットフード協会の調べでは、全国に11,936千頭の犬が飼育されていると言われているから、この割合で単純換算すると、なんと**年間20万件以上もの誤飲**が全国で発生していると推測される。誤飲では、経過観察で問題ない症例も多い一方、ときとして緊急手術を必要とし、ついには死に至る場合もあり、どうぶつ医療の介入度合いに絶妙な判断が要求される。またこうした症例は、大学病院などの2次診療施設へ紹介されることがほとんどないため、その研究が発展することもあまりなく、科学的にその傾向と対策について検討が重ねられてきたとは言い難い。

獣医師の任務は、「飼育動物に関する**診療**及び**保健衛生の指導**（獣医師法第1条）」である。この30年、多くの先輩獣医師の手によって家庭どうぶつ医療が急激に発展してきた。とりわけ、**診療**の充実に関する発展は目を見張るものがあるだろう。これからは、**保健衛生の指導**という任務に関しても、社会全体として「知の共有」を図るという観点から、保健衛生に関わる事故情報などを集め科学的に分析し、産業動物同様に家庭どうぶつ医療の分野においても充実が図られるべきである。こうした見地から考えると、誤飲についても、「それは飼い主の責任」と一言で終わらせるのではなく、誤飲が起きないように指導するところまでがわれわれ獣医師の役割と言えるのではないかと。実際、調査を開始してみると、犬、猫の誤飲はヒトの乳幼児の誤飲と若干異なり、再発や品種

差があるなど偶発的な事故と片付けにくい部分があることに気づく。

このような経緯から、どうぶつ保険という社会インフラを担う立場の獣医師として「犬、猫の誤飲」をテーマに、動物病院、動物行動学者、一般飼い主にアンケートや個別ヒアリングを開始した。まだまだ、始まったばかりの試みであるが、できれば多くの先生方から、忌憚なきご意見とご協力をいただきたく、現時点で判明している「傾向と対策」をここに共有したい。本稿は、その【傾向編】であり、次号の【対策編】もお読みいただけるとうれしい。

12月と夜間はとくに要注意！

2011年11月14日～12月24日に、インターネット上で獣医師向けにアンケートを実施した（年末のお忙しいなか、ご協力くださった先生方に深く感謝いたします）。その結果から、動物病院に来院する誤飲について以下に傾向をまとめる。

年間を平均して、誤飲（疑いを含む）の症例に出会う頻度は、「1カ月に1回」が26%、「2週間に1回」が22%、「1週間に1回」が13%、「それ以上頻回」が7%であった（表1）。

表1 獣医師172人に聞きました～犬、猫の誤飲診療の実態①～

年間を平均して、異物誤飲（疑いを含む）の症例に出会う頻度をお選びください。	(1) 1日1回	0%
	(2) 2～3日に1回	5%
	(3) 4～5日に1回	2%
	(4) 1週間に1回	13%
	(5) 2週間に1回	22%
	(6) 1カ月に1回	26%
	(7) 2～3カ月に1回	28%
	(8) 未回答	4%
季節性はあるように感じますか。 ※複数回答可	(1) 春に多い	3%
	(2) 夏に多い	5%
	(3) 秋に多い	2%
	(4) 冬に多い	5%
	(5) クリスマスに多い	14%
	(6) お正月に多い	13%
	(7) バレンタインに多い	2%
	(8) とくに感じない	73%
	(9) その他	6%
バーベキュー（夏）。休日・連休。家族が多いときにはその傾向あるかも。子供やお父さんが休みのとき。同時期に多発する。イベントのあるときはその関連の物を誤食することが多いように感じます。		
来院の時間帯に特徴があるように感じますか。 ※複数回答可	(1) 午前の診察開始直後が多い	7%
	(2) 午後の診察開始直後が多い	12%
	(3) 夜間が多い	28%
	(4) 時間帯に特徴はないと思う	58%
	(5) その他	8%
休日で家に人がいるとき。休日の急患。休日は昼に多い。飼い主帰宅時（夕方～夜）。診療時間外が多い。終業間際。昼の休診時間。夜に飲んで朝まで待つ人が多いので、朝が多くなります。夕方の散歩後。		

* 2009年度に契約を開始した0～10歳齢の犬を対象に、同一個体で期間内に複数回の請求があった場合は1件として算出

病院の規模が影響するとは思われるが、おおよそ**1カ月に1～2回**は誤飲患者が訪れるという動物病院が多いようだ。

季節性に関しては、「とくに感じない」との回答が73%と多かったものの、「クリスマスに多い」が14%、「お正月に多い」が13%であった。そこで、アニコム損保に対する誤飲での請求件数**を月別に集計したところ、**12月がもっとも多く**、1月～3月までその傾向が続いていた（図1）。「冬休みで家族が家にいる時間が長い」、「来客が増える」、「大掃除や年越し準備などで愛犬から目を離してしまう時間が増える」などが要因として考えられ、この時期の注意喚起がとくに必要であると考えられた。

来院の時間帯に関しては、「時間帯に特徴はないと思う」との回答が58%と多かったものの、「夜間が多い」28%、「午後の診察開始直後が多い」12%であった。ヒアリングを開始して、夜間動物病院で働く獣医師のほとんどから「夜間病院で働くようになった最初の頃は、誤飲が思いのほか多くて驚いた」との声をよく耳にした。現在調査中ではあるが、夜間動物病院では全診療の約10%という高い割合で誤飲（疑い含む）の患者が来院するようである。例えば、DVMs どうぶつ医療センター横浜（旧・横浜夜間動物病院）では、過去2年間で460件が誤飲で来院している。単純計算で3日に2件以上の頻度である。夜間動物病院は、その存在そのものが地域医療体制の要であるが、誤飲対策に関しても重要な役割を担うと考えられる。

余談だが、誤飲対策を考えるようになって、夜間動物病院の経営に携わっている先輩先生方に相談するたびに、笑って「お前は、夜間動物病院の（経営上の）敵だなあ」と言われている。まさにこれぞ、医療と経済のジレンマであり、保険やその他の社会システムでうまく乗り越えていきたいと思う（ですので、引き続き、ご協力のほど伏してお願い申し上げます）。

** 2009年度にアニコム損保に契約した犬252,414頭（0～10歳齢）を対象に保険金請求データを集計
消化管内異物、タマネギ/ネギ中毒、チョコレート中毒、タバコ中毒、殺鼠剤中毒、薬物中毒のいずれかの診断名で請求があったものを抽出

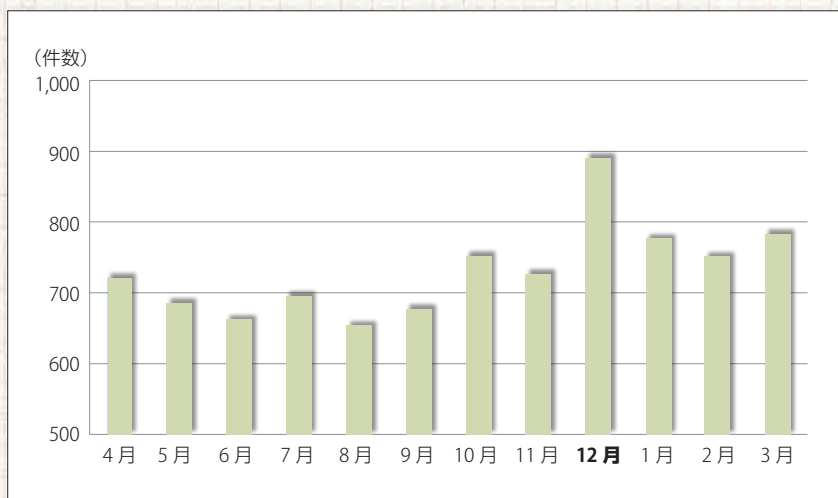


図1 誤飲での請求件数**（月別）

表2 獣医師172人に聞きました～犬、猫が誤飲するもの～

I. 異物	a.経験のある異物	b.死亡経験のある異物	暫定致死率 (b/a*100)
1 ひも	150	27	18%
2 靴下やタオル、雑巾などの布類	145	13	9%
3 (団子や焼き鳥などの)竹串	138	9	7%
4 果物や梅干しの種	150	8	5%
5 石や砂	148	8	5%
6 ボール	141	7	5%
7 犬用ガム	116	5	4%
8 プラスティック	134	5	4%

II. (中)毒物	a.経験のある異物	b.死亡経験のある異物	暫定致死率 (b/a*100)
1 エチレングリコール(不凍液)	48	28	58%
2 ナメクジ駆除剤	48	20	42%
3 殺鼠剤	78	29	37%
4 観賞用コリ	34	12	35%
5 除草剤	78	21	27%
6 ヒトの医薬品	150	16	11%
7 チョコレート	141	9	6%

a.「今までに1回以上経験したことのある異物内容物をすべてお選びください」という設問に対する「ある」の回答数

b.「異物摂取が原因で死に至った経験のある内容物を教えてください」という設問に対する「ある」の回答数

ひも、靴下やタオルなどの布類、ヒトの医薬品は、誤飲が多く死に至るケースも多い

死亡経験も多い異物は「ひも」「靴下やタオルなどの布類」「ヒトの医薬品」

ここまで「誤飲」という言葉を使ってきたが、飼い主が使う、もしくは、獣医師同士が用いる同様の言葉に、「異物誤飲」「(異物)誤食」「誤飲誤食」「誤嚥」「盗食(盗み食い)」「拾い食い」

「異嗜」「異食(症)」「pica」「ingestive behavior」「消化管内異物」などがあり、異物内容や発生状況、症状などの個別の状況によってより適切な表現が使われている。われわれが診療および保健衛生の指導の対象として科学的に議論する際に、一番広義の意味として、今回「誤飲」という言葉を採用したが、誤飲の内容物を調査するにあたっては、どうぶつにとって「誤って

飲んだ(＝誤飲)」わけではない、「チョコレート」「果物」「犬用おやつ」「犬用ガム」などの扱いに困ってしまった。飼い主にもイメージしやすいより適切な言葉があればと思う。

異物内容は、1) 消化管穿孔・腸閉塞など物理的な危険性を持ついわゆる「Ⅰ.異物」と、2) 全身症状を引き起こす薬理的な危険性を持つ「Ⅱ.(中)毒物」とに大別され、一般的に前者の発生件数のほうが多いが、後者は発生件数自体はそれほど多くないものの深刻な症状を示すことが多いという特徴があり、その対処法は若干異なっている。そこで、異物内容についてのアンケート結果を、筆者の判断により「Ⅰ.異物」「Ⅱ.(中)毒物」に大別して考察を行った。さらに、それぞれの異物内容について「a. いままでに1回以上経験したことのある異物内容」を分母にし「b. 異物摂取が原因で死に至った経験のある内容物」の割合を算出することで、内容物ごとの致死性を暫定的に表してみた(表2)。この数値が、本来意味するところの致死率とは全く異なることは重々承知しているが、内容物ごとの死に至る危険性を現時点で入手できたデータから暫定的に予測したいという意図から、ここではこれを暫定致死率と呼ぶこととした。

Ⅰ. 異物

異物のなかでもっとも暫定致死率が高かったのは、「**ひも**」であった。アンケートに答えてくださった87%の先生に経験があり、**16%の先生に死亡経験**までであった。続いて、暫定致死率が高かったのは、「靴下やタオルなどの布類」、「(団子や焼き鳥などの)竹串」、「果物や梅干しの種」、「石や砂」、「ボール」と続いた。これらの異物は、ヒトの乳幼児の誤飲事故***ではほとんどみられず、犬特有の行動習性、もしくは、犬と飼い主との関係に起因する可能性がある。

Ⅱ. (中) 毒物

(中)毒物のなかでもっとも暫定致死率が高かったのは、「**エチレングリコール(不凍液)**」であった。

*** 参考：厚生労働省，平成22年度乳幼児家庭用品に係る健康被害病院モニター報告

表3 飼い主3,313人に聞きました
～犬の中毒物に関する認知度～

これらが犬に中毒を起こすことを知っていますか？	(中)毒物	知っていると答えた人の割合
	ネギ類	98%
	チョコレート	91%
	観賞用ユリ	29%
	ポインセチア	25%
	シクラメン	20%
	チューリップ	15%
	αリボ酸(ヒト用サプリメント)	13%

表4 獣医師172人に聞きました～誤飲による死亡例があった内容物～

Ⅰ. 異物	件数	Ⅱ. (中)毒物	件数
ひも	27	殺鼠剤	29
靴下やタオル、雑巾などの布類	13	エチレングリコール(不凍液)	28
犬用おやつ	3	除草剤	21
(団子や焼き鳥などの)竹串	9	ナメクジ駆除剤	20
果物や梅干しの種	8	ヒトの医薬品	16
石や砂	8	観賞用ユリ	12
ボール	7	チョコレート	9
犬用ガム	5	ネギ類	4
プラスチック	5	タバコ	3
トウモロコシの芯	4	観葉植物	3
ジャーキーなどの食品やその包装物	4	肥料	3
ストッキング	4	キシリトール	3
硬貨	3	鉛	3
ビニール袋	2	生ゴミや腐った食べ物	2
鶏の骨(フライドチキンなど)	1	洗剤などの薬剤	2
アクセサリーなどの小物	1	農薬	2
ネズミのオモチャ	1	ポインセチア	1
固まる猫砂	1	ヒキガエル	1
使用済みナプキン	1	キノコ	1
指輪	1	アルコール	1
アイスキャンディの棒	1	αリボ酸	1
食パン包装を閉じるプラスチックの栓	1	ダイエットサプリメント	1
大根(食道内)	1	正体不明の薬品(路上に置かれていた)	1
壁紙	1	灯油	1
		有機リン系の農薬	1
		電池	1
		群生ユリ(ヤマユリ)	1

車のエンジン用の不凍液だけでなく、夏場に使われる保冷剤の誤飲事故も発生している。熱中症対策などに保冷剤を使う場合は重々注意しなくてはならない。続いて暫定致死率が高かったのは、「ナメクジ駆除剤」「殺鼠剤」「観賞用ユリ」「除草剤」である。これらは、誤飲事故の発生そのものはそれほど多くないが、発生してしまうと死に至る可能性が高いというきわめて危険度の高い、絶対に誤飲させてはならないも

のであると言える。とくに「観賞用ユリ」は、観賞用として一般家庭に身近な植物であるにもかかわらず、犬、猫が食した場合に致死性があることは、「ネギ類」「チョコレート」に比べてあまり知られておらずとりわけ注意が必要である。ちなみに、アニコム損保の「どうぶつ健保」の契約者を対象に行ったアンケート(表3)では、「チョコレート」がどうぶつに中毒を起こす可能性があることを知っていた人が

91%だったのに対して、「**観賞用ユリ**」が**中毒を起こす可能性**があることを知っていた人は29%しかいなかった。

また、「**ヒトの医薬品**」は暫定致死率が高かっただけでなく、回答者の87%に経験があり、**28%には死亡経験**まであった。

表4に、死亡経験があると1人でも回答があった内容物をあげておく。自身としては死亡経験がなかったとしても、全国には死亡例もあるということを知り「ワクチン」として有効活用していただけたら幸甚である。

飼い主からよく聞く言葉
「ちょっと目を離したすきに」

6割以上の回答者が「ちょっと目を離したすきに」「あっと思ったときには、もう遅くて」「危ないといつも気を付けていたのですが」を、飼い主からよく聞く言葉としてあげている（表5）。つまり、犬、猫の誤飲は確かに飼い主の不注意ではあるのだが、普段から飼い主が常に不注意というわけではなさそうである。

また、「最近ダイエットをさせていて」という言葉を、8%の回答者がよく聴くと答えていた。前述の契約者向けアンケートでも、誤飲で病院に行った際にダイエット中だったという回答者が5%いた。避妊・去勢後や、肥満傾向のどうぶつに対してダイエット指導をする際には、その個体の性格への配慮や環境整備を促したうえで、食事回数を頻回にする・寒天など満腹感を得やすい素材を組み合わせる・ハンドフィードで食事時間そのものを長くするなど、誤飲リスクの高い空腹時間を減らす指導も合わせて行うべきと考えられる。

誤飲は「無症状」も多い

誤飲でみた経験のある症状としては、嘔吐（急性、間欠性など程度や病状はさまざま）、食欲不振、下痢などの消化器症状は8割以上の回答者に経験があり、ほかにも呼吸困難（食道内異物による気管の圧迫）、皮膚膿瘍（竹串などが皮膚まで貫通）、神経症状や腎不全（中毒）などがあげられた（表6）。また、誤飲の特徴ともいえる「無症状」も8割を超える回答者

表5 獣医師 172 人に聞きました ～誤飲で来院された飼い主からよく聞く言葉～

誤飲で来院された飼い主からよく聴く言葉を次から3つお選びください。	ちょっと目を離したすきに	92%
	「あっ」と思ったときには、もう遅くて	91%
	危ないといつも気を付けていたのですが	63%
	おとなしいのでおかしいなと思ったら	19%
	最近ダイエットをさせていて	8%
	いつもはおとなしいのに	5%
	出かけようとバタバタしていたら	4%

● ほかに飼い主からよく聴く言葉があれば、お教えてください（自由回答）。

うちの子は異物を食べるはずがない。うちの子にかぎって異物は飲み込まないはずなのに。うちの子は何も食べていない！異物を食べる子ではないのですが。うちの子は異物を摂取しないと思う。いつもはしないのに。飲んでいない。食べていない。（異物としてではなく、嘔吐などの消化器症状で来院し、結果的に異物だった）異物を食べてはいないと思う。異物の可能性はないと思います。異物は飲んでません。異物誤食は絶対にないと思う。異物を食べることはありません、とおっしゃるが原因が異物だったことはよくあります。何も飲んでいない。この子はいたずらする子でない。何も食べてない。誤飲する子ではありません。何故か食べてしまった。食べさせた覚えがない。そんなものはうちにはない。摘出した異物に見覚えがない。

取ろうとしたら飲み込んだ。口にくわえたので取り上げようとしたら、抵抗してそのまま飲み込んだ。無理やり取ろうとしたら飲まれました。噛んでいる物を取ろうとしたら飲んでしまった。何かかじっていたので、取り上げようとしたら飲みこんでしまった。危ないのでも取り返そうと思ったら、慌てて丸呑みした。取り上げようとしたとき。取り上げようとしたら飲み込んだ。くわえていたモノを取り上げようとしたら飲み込んだ。口から取ろうとしたときに、飲み込んだ。

留守にしている間に。散歩中に。ゴミをあさった。帰宅したら、こう（異物摂取）なっていた。帰宅したら、荒らされていました。帰宅したら、室内が荒らされていた。留守から戻ったら。朝起きたら。留守番中に。忙しくてあまりかまっていられない。

食べたような気がする。たぶん誤飲したと思います、数が合わないの。探してもないんです…。飲んだかどうかかわからないけど、周りに見当たらないので食べたかもしれない…。多分…。そういえば、～がなくなっているかも？荒らした跡があるが、何をどれくらい食べたかわからない。食べたと思う…。食べちゃったみたいだけどほんとに誤飲しているかわからない。食べたと思うのですが…。なくなっているので、たぶん食べたと思います。部屋のどこを探しても「???」がないんです。

うちの子は何でも食べてしまう。もともとなんでも食べちゃう子で。いたずらが多くて。うちの子はいつも。落ちたものをいつもさっと食べにくる。この子は何でも食べてしまうので。なんでも口にしてしまう。なんでも食べちゃうんですよ…。やるなあと思っていました。食物関連は飼い主さんが味を覚えさせたことが原因であり、飼い主さんの責任なのに「いつもいたずらばかり」とか「盗み食いばかりで困る」とか…責任感がなさすぎです。前にもやったことがある。前にも食べて吐かせてもらったことがあります。「いつも（誤飲した異物で）遊んでいるので大丈夫だと思って」その異物を噛んで遊んでました。それくらい普段からよく食べているから大丈夫ですよ？前は大丈夫だったので。舐めかじりしていたが、飲み込んでいないと思った。

ごめんなさい……。すいません。私が悪いんです…。

まさかこんなもの食べるなんて。まさか、こんなものを食べるとは思わなかった。まさか串ごと飲むとは思わなかった。こんなものは食べられないと思った。焼き鳥を食べさせようとして、串を持って近付いたら、竹串ごと飲み込んだ。食べる（飲む）とは思わなかった。

ちゃんとしまっていたのに…。こんなところまで届くとは思ってませんでした。ちゃんと届かない所に置いたのですが。届かないと思ったのですが。届かないと思ってたんだけど…。気を付けていたのですが。

これって食べさせたらダメなんですか？ネギ類がダメなのを知らなかった。しばらく様子を見ていました。電話で「〇〇を飲み込んだのですが、このまま様子を見ていてもいいでしょうか?」。気付かなかった。なんか変なんです。一般的に神経質ではない飼い主が多いように感じます。

子どもが落とした物を食べてしまった。おばあちゃんが油断して…（ほかの家族のせいにされる）。来院された方ではなく、別の家族が起因していると、おっしゃることが多い。まあ、自己弁護でしょう。その言葉の連発ですね。



図2 オキシドールで糜爛した犬の胃内
(写真提供：亀戸動物病院・石川朗先生)

が経験していた。DVMs どうぶつ医療センター横浜・救急診療センター医長の新井創人先生は、飼い主がどうぶつが誤飲する場面そのものを目にしたと話した場合も含め、「本当に食べたのか？」を念入りにしつこくいくらいに聞く必要があると強調している。念のために在宅している家族にもう一度飼い主が誤飲したと考えたものがないか探してもらおうと、ソファの下などから見つかる場合もあるようである。一方で、亀戸動物病院副院長の石川朗先生の調査によると、「異物を食べた」もしくは「異物を食べたかもしれない」との主訴で内視鏡検査を行ったところ、86%の割合で「実際に食べていた」という。誤飲が強く疑われる場合には早めに**内視鏡検査**を勧めたいところである。内視鏡は、麻酔をかけるという負担があるものの、検査だけでなく異物摘出までできるという優れものである。しかしアンケートでは、単純X線検査「かならず行う55%、よく行う42%、あまり行わない2%」、バリウム検査「かならず行う3%、よく行う66%、あまり行わない28%」に対して、内視鏡検査「かならず行う1%、よく行う53%、あまり行わない40%」という結果だった（それぞれ無回答あり）。まさに、病院設備や技術が、提供できる医療内容に影響しているケースと言えるだろう。社会からの多様化するどうぶつ医療ニーズに対応していくためには、地域連携によって必要なときにより適切な医療が提供できる体制を構築しておくことが、日本の家庭どうぶつ医療において必須になっていく。日本の家庭どうぶ

つ医療界でも訴訟数が増加しているという現実からも、地域連携の必要性は年々増していくといえるだろう。かかりつけ医と地域中核病院との連携を密にすることで、各自がそれぞれの得意分野をより伸ばすことにコストをかけることができ、全体的により多様で質の高いどうぶつ医療が提供できるようになるはずだ。家庭どうぶつ医療は、ヒトの医療に比べて発展途上である分、新しいことにチャレンジしやすい。ヒトの医療に先駆け、そんな理想の医療体制ができればと夢見ている。

「オキシドール」VS. 「トラネキサム酸」

さて、最後に、催吐剤についての議論で本稿を終わりとしたい。犬で一番使用されていた催吐剤は、「**オキシドール**」46%、続いて「**トラネキサム酸**」38%、「食塩」9%であった。猫の催吐剤では、「トラネキサム酸」28%、「オキシドール」22%、「メドトミジン」17%という結果であった。筆者は代診時代に「オキシドール」を何の疑問も持たず使用していたが、誤飲症例数の多い夜間動物病院では、そろって「トラネキサム酸」を第一選択に使っていた。理由もみな同じで、「オキシドール」を使ったあとに内視鏡で胃を覗くとひどい糜爛があるのだという（図2）。確かに、この写真を目にしたら「オキシドール」を使うことに躊躇するのではないだろうか。「トラネキサム酸」は、血管確保の手間はかかるが、静脈注射後かなりの確率ですぐに吐いてくれるし、吐いたあとも犬がけろっとしている。副作用がないと

は言いきれないし、「トラネキサム酸」自体は止血剤であるから、メーカーの示す薬効外の使用となる。つまり、獣医師の裁量権で使用する事になり、飼い主へのインフォームド・コンセントが重要になる。また、よりスムーズなインフォームド・コンセントのためにも、「トラネキサム酸」の催吐作用とその利用の安全性についての臨床研究が進むことが重要だ。いま、その研究をしてくださる方を探しているので、心当たりのある方はぜひお声掛けいただきたい。

以上、動物病院に来院した犬、猫の誤飲について【傾向】をまとめた。保健衛生の指導にまで行きつくためには、動物病院に来院まではしていない、いわゆる「ヒヤリハット」の状況にも注目する必要がある。次号では、そのヒヤリハットについても検証し、動物行動学の観点から、またヒトの小児科分野などでの研究も参考にしつつ、【対策】についてまとめたい。本稿に関しては、連絡先：hakusho@ani-com.comまで、忌憚なきご意見をいただければ幸甚である。

表 6 獣医師 172 人に聞きました ～犬、猫の誤飲診療の実態②～

異物誤飲で診たことのある症状をすべてお選びください。			
無症状	81%	その他 けいれん発作、流涎、下血、活力低下、元気消失、腹痛、腰部から竹串、出血、黄疸、異常興奮、神経症状、腎不全、多量の飲水、体重減少、沈うつ、敗血症、貧血、頻拍、腹膜炎、意識障害、口をクチャクチャする	12%
急性の軽い嘔吐	69%		
急性の激しい嘔吐	85%		
食欲不振	87%		
下痢	60%		
呼吸困難	38%		
皮膚膿瘍	19%		
間欠的に続く嘔吐	88%		
動物は無症状だが、「さきほど竹串を飲んだ」と飼い主から電話連絡があった場合、どのように対応されますか。			
すぐに来院を促す	87%	その他 内視鏡で確認することを勧める。内視鏡のある病院を紹介する。外科的対応。さらに同じ竹串があれば持参してもらう。串を噛み砕いているかどうか確認する。時間帯によって決める。食事の有無をチェック。食物を与え、食物とともに嘔吐させる。竹串の大きさ、状態(肉が付いているのか、折れた状態での誤食かなど)を確認して判断。電話で説明のうえ、基本的には来院していただく。	7%
とりあえず様子を見ていただく	8%		
吐かせる	5%		
貴院ではどのような検査を行いますか。			
一般身体検査	かならず行う	96%	その他 超音波検査(腸内異物を疑う場合、脾炎併発など、胃腸の動きをチェック、形状をみる、内視鏡検査の前に)。エコー検査はかならず行います。CT。オムニバークによる消化管造影。ケースバイケース。さっき誤食したなら検査はほとんど必要ない。嘔吐があるならX線と血液検査をする。慢性的であればさらにバリウムやCTなど検討する。ルーチンに検査を行うことはない、状況に応じて実施する。異物の種類によっては糞便検査、尿検査。炎症マーカー。バリウム・血液・内視鏡は場合による。開腹するとなったら凝固機能・胸部X線、心電図等追加。試験開腹。神経学的検査。穿孔の恐れがある場合は造影するならガストログラフィンを使用。透視。必要に応じて、凝固系や超音波を用途に応じて選択。
	よく行う	3%	
	あまり行わない	0%	
一般X線検査	かならず行う	55%	
	よく行う	42%	
	あまり行わない	2%	
バリウム検査	かならず行う	3%	
	よく行う	66%	
	あまり行わない	28%	
血液検査	かならず行う	32%	
	よく行う	54%	
	あまり行わない	12%	
内視鏡検査	かならず行う	1%	
	よく行う	53%	
	あまり行わない	40%	
貴院ではどのような治療をしますか。 ※複数回答可			
薬などで嘔吐させる	91%	その他 胃洗浄。中毒を起こす可能性のあるものを大量に摂取した場合は胃洗浄(稀)。短時間麻酔で、動物を縦にして揺らしてみる(引掛かりのない食道内異物はこれで取れることがある)。内視鏡処置のできる病院を紹介する。バリウムによる検査で、流れることを祈る。ものによっては高繊維食を与える。ラキサトーンの処方。薬ではないが、「ラキサトーン」の頻回服用。活性炭の投与、処方。犬種、異物の種類、量によっては無治療経過観察。食べたものや量によっては経過観察のみで無処置のこともあります。物によっては無治療。出てきそうなものなら、様子をみる。症状により適宜。状態による。無処置(排便による排泄を待つ)も場合によってはありかと思えます。無処置で、飼い主様に排泄物内に異物が出てこないか確認してもらう。問題がない異物は様子をみる。食道内異物が食べ物である場合、麻酔下で胃に送り込む。腸を通過しそうな異物の場合、高繊維性食を給餌して、肛門からの排出を促す。毒物なら拮抗薬。拮抗薬があるものは投与。腹腔鏡を使って胃の中で細かく砕いて袋に収容して取り出すか、便に出させる。腹腔鏡を補助的に用いて胃、腹壁の小切開にて取り出す。薬などで通過を促す。流動食を給餌する。	
内視鏡で異物を取り出す	71%		
開腹手術で異物を取り出す	96%		
点滴をする	69%		
内服薬を処方する	54%		
犬の催吐処置でメインとして使用している薬剤をお教えてください。			
オキシドール	46%		
トラネキサム酸	38%		
メトミジン	1%		
食塩	9%		
トコンシロップ	3%		
キシラジン	1%		
猫の催吐処置でメインとして使用している薬剤をお教えてください。			
オキシドール	22%	その他 猫では催吐処置をほとんど行わない。猫ではあまり催吐させてません。猫では、誤食の内容的に催吐処置をすることがなかった。催吐は基本的にしない。経験なし。そういえば猫で催吐処置をした記憶がありません。	8%
トラネキサム酸	28%		
メトミジン	17%		
食塩	4%		
トコンシロップ	2%		
キシラジン	6%		
催吐処置剤が原因と思われた合併症、副作用のご経験があればお教えてください。 ※複数回答可			
吐血	13%	その他 誤嚥、虚脱、ケイレン発作、飼い主の不安、ショック、よだれ、胃潰瘍、胃捻転症候群、元気消失、食欲不振、呼吸困難、口腔糜爛・食道炎、催吐後のてんかん発作、食道につまった(10cmの長ネギ)、心不全の犬に高濃度食塩水で催吐を試みた後心不全の悪化、沈うつ、電解質異常、頻脈	14%
嘔吐の持続	47%		
血便	2%		
下痢	13%		
肝酵素の上昇	5%		
貧血	1%		

臨床現場と行動学の専門家が ともに考える“誤飲対策”

— 編集部 —

昨年 12 月 12 日 日、アニコムホールディングス大会議室で、「わんこの異物誤飲をどう減らしていくか？」をテーマにした勉強会が開催された。「誤飲ゼロ」につながる啓発を目的とし、DVMs どうぶつ医療センター横浜・救急診療センターの新井創人医長による「夜間動物病院の現場から」、日本獣医生命科学大学獣医学部獣医保健看護学科の水越美奈講師による「誤（食）飲する犬に対する 実践的/予防的アドバイス」と題した講演が行われ、40 名近くの参加者が熱心に聴講した。アニコムグループ社員、一次診療施設、夜間救急病院などの獣医師らが集まった同勉強会について紹介する。



夜間動物病院にとって 非常に身近な誤飲

新井医長によると、過去 2 年間で同救急診療センターに来院した誤飲症例の総数は 460 件あり、そのうち内視鏡実施症例は 137 件、開腹手術にまで至ったケースは 14 件であった。犬種別にみるとミニチュア・ダックスフンドが 78 件ともっとも多く、ついでチワワ 58 件、トイ・プードル 44 件、ほかに猫、フレンチ・ブルドッグ、雑種犬、ラブラドル・レトリバー、パピヨン、ヨークシャー・テリア、柴、ミニチュア・シュナウザーなどであった。

誤飲症例への対応時、消化管穿孔、腸閉塞などを引き起こす物理的な危険性がある場合は、飼い主への詳細な稟告聴取で食べたものの、時間、量、症状、食事はしているかを確認し、腹部 X 線検査を行ったのち、催吐処置/内視鏡/開腹手術などを選択する。中毒症状を引き起こす薬理的な危険性がある場合は、上記同様の詳細な稟告聴取、腹部 X 線検査、血液検査ののち、催吐処置/内科療法(点滴によるウォッシュアウト、吸着剤、解毒剤などの投与)/胃洗浄などを行うが、「いずれの場合でも飼い主に、本当に誤飲をしたかどうかしつこくくらいに聞く」ことが重要であった。

新井医長はこうした症例を日々診療するなかで、食道に巨大なリンゴを詰まらせたチワワを連れてきた飼い主や、日常的に鶏の骨を与えていた飼い主など、「誤飲のリスクに対してあまりにものんきな飼い主が多い」一方、下痢など、なんらかの症状が発現すると真っ先に誤飲を疑い、中毒ではないかと質問する飼い主も多いとした。つまり、犬は何でも飲みこんでしまうという漠然とした認識は持っていますが、実際にどんな状況で誤飲が発生するかという具体的なイメージに乏しい飼い主が多く、誤飲について飼い主と獣医師の認識のギャップを埋めることが発生ゼロへの道ではないかとまとめた。

飼い主には頭の痛い誤飲 犬にとっては楽しいゲーム

次に、日本獣医生命科学大学付属動物医療センターで行動治療科を担当する水越講師は、「犬にとって、おもちゃなどを飼い主と奪い合うことが飼い主の関心をひける楽しいゲームになっており、これが誤飲の原因となっていることがもっとも多い」とした。こうした場合、犬はおもちゃを奪われまいと、飼い主に奪われる前に口に入れ飲み込んでしまう。こうすることで飼い主からおもちゃを奪うことに成功し、犬にとっては楽しいゲームが成立したという認識になる。とくに誤飲を繰り返す患者はその傾向があるとした。ほかにはラブラドル・レトリバーやビーグル、フレンチ・ブルドッグなど、食物への執着が強い犬種であることやダイエット、分離不安や常同障害、退屈しているときにかじるものが与えられていないことなどを誤飲の原因としてあげた。

原因別の対処法についても解説がなされ、実際には、上記にあげた原因が複数関係し、空腹→ゲーム、不安→ゲームという流れになることが多いため、まずは犬が異物を口にすることをゲームとして認識してしまうことを防ぐ対応が必須であるとした。第 1 の対応は、環境整備により口に入れてほしくないものはとにかく片づけることで、犬の視線で確認を行い、とくにスーパーボールなどの表面がつるりとしたものに注意が必要であると指摘した。

食物に対する執着への対応としては、食事のかさを増やす、知育玩具の使用や食器を使わず手で与えるハンドフィードにより食事に時間がかかるようにするなど、食事の与え方の工夫をあげた。また、知育玩具を使用する際は、かならず飼い主が見ているところで行わせることとした。

玩具やガム、コングなどについてとくに注意すべきこととして、一般的に与えられているものは犬のサイズに比して小さすぎるこ

が多く、そのまま飲み込める大きさであることも珍しくないことが詳しく紹介された。飼い主への指導の際は、ペットショップで勧められるものの 2 サイズ程度大きいものを与え、口にすっぽり入る大きさのものは与えないといったアドバイスが必要であるとした。また、ガムは口に入る大きさになる前に捨てる、両端に結び目のあるガムは結び目部分を噛みちぎり誤食することが多い、素材によっては歯を痛めるガムもあるので注意が必要、噛みちぎって飲み込むことのできる中綿の詰まったぬいぐるみや、軟らかい素材の玩具に注意する、購入から 1 年以上経つとゴムが劣化して割れやすくなるので、定期的に新しいものに交換するといった指導も重要であると指摘した。

拾い食いをする犬に簡単で効果的な対処法として、散歩時などに飼い主が犬の頭上からトリーツなどを与える方法も紹介した。また、犬に「ちょうだい」を教えることで、ものを守ろうとする(奪われることを拒否する)のではなく、飼い主に玩具などを預けることで良いことが起こることを理解させ、犬をコントロールしやすくするトレーニングも誤飲防止に効果があるとし、講演を終えた。

家庭どうぶつ医療に関するシンポジウム

テーマ「犬、猫の誤飲」

日時：3月18日 日13時30分～17時

場所：アリミノホール地下1階
(東京・高田馬場)

<問合せ先>

アニコムホールディングス 経営企画部
TEL：03-5348-3911 FAX：03-5925-6959
E-mail：hakusho@ani-com.com